

一大産地の救世主となるか

蔵王町は「里芋」の生産量宮城県内一を誇る。その歴史は古く、明治17年頃、福島県伊達村から伝わり町内の下別当地区の気候と土壌が里芋栽培に適していたことから、瞬く間に広がったと伝えられている。

町内産の「大和早生」は昔から「蔵王芋」と呼ばれ、他産地のものに比べ、ねばり気が強く、市場では高値で取引されるという。

しかし、他産地の例に漏れず「後継者不足」や「生産者の高齢化」の問題がある。

そんな中、生産者の負担を減らし、栽培面積を拡大する狙いから、今年度宮城県の普及プロジェクトとして「畝立て作業」「施肥作業」「マルチ掛け作業」を同時に行う省力化機械の実証実験を行った。



今年度の実験では、3つの工程における作業時間が慣行栽培に比べ約60%削減できたため、導入による効果に期待が高まる。

現在、蔵王町では「米」と「梨」をブランド農産物として認定しており、「里芋」が次の候補となっている。

産地の条件、ストーリー性と、ブランドとなる要素は十分兼ね備えており、安定供給が課題となるだろう。今後、この省力化機械が普及し産地の「救世主」となるか注目される。

【記事提供：蔵王町農業委員会】